

## 第5回 『美食の報酬』

(通算25回)

2005.2.17

「美食」とは言うまでも無く「美味しい食べ物」のこと。これが嫌いだ、という方はまずおられないでしょう。誰でも美味しいものは好きだし、それを食べることが基本的な人生のmotivationになっていることは否定できるものではありません。だから「美味しいものは食べちゃダメ」と言われたところで「そうですか」とはならないのが普通です。ただ、「そんなことしていると××になっちゃうぞ」と脅かされれば別ですが…。

美食を嫌う人はまずいらっしやらないでしょう。でもそれがどういう結果をもたらすかを自身で覚悟することは大事なことです。これは薬に置き換えても同じこと。辛い症状が手軽に楽になるなら、それを否定できる人はまずいないのですが、どういう結果をもたらすかについて考えることを忘れてはいけません。

「楽になりたいから薬を」→「でも副作用があると嫌だ」→「漢方薬なら安心」→「だから漢方治療で」という図式はある意味漢方薬の人気を支えている一つの要素であることは事実です。確かに漢方薬の副作用はおおむね西洋薬のそれよりは少ない。だから正しい考え方だとは思いますが。しかし、漢方薬も薬なのですから、使うなら「結果」についても考えておかないといけませんね。

「冷え症」という言葉があります。漢方治療の得意分野でもあります。何故かと言えば漢方には「温める」という考え方があり、「冷えているから温めれば」となるからです。確かに冷えた方に温熱薬を投じれば温まり、症状が楽になることは事実です。

一方、「漢方で体質改善」なんていう表現もあります。「症状を取り去るだけじゃなく根本から治さなくては」ということなのでしょう。でも、「冷えているから温めれば」が本当にそれに当たるかどうか考えてみると…？ 温めるのを止めたらどうなるか、と考えると…？

美味しいものを食べるのは誰でも好き。そんなのだから、と言われても納得はゆきません。しかし美味しいものを食べつければ「もっと美味しいもの」が食べたくなるのも事実です。それが人間の性というものですよ。薬についても同様、同じように考えるのは大事なことだと思います。

本日の番外編では「個の医療」について考えるヒントとして「クローン技術」をとりあげてみます。進化の過程で我々が手に入れた有性生殖と個の関係について考えてみましょう。

知識を超えて思考の世界へ。どうぞわれわれがご用意いたしました診察室へお出かけください。さあ、本日も漢方診療のはじまり、はじまり。

## 【本日のkeyとなる生薬】

附子 乾姜 麻黄  
桂枝 当帰 川芎

それぞれの生薬から『思いつく処方』をご想像ください。その処方の目的はどこにあり、そしてどのように使い分けるのでしょうか。

## 【本日の内容について、ご確認ください】

真武湯：附子、生姜、茯苓、蒼朮、芍薬

麻黄附子細辛湯：附子、細辛、麻黄

八味地黄丸：附子、桂枝、地黄、山薬、山茱萸、茯苓、沢瀉、牡丹皮

桂枝加朮附湯：附子、桂枝、芍薬、生姜、大棗、甘草、蒼朮

大防風湯：附子、乾姜、当帰、川芎、芍薬、地黄、人参、蒼朮、大棗、甘草、防風、牛膝、黄耆、杜中、姜活

苓姜朮甘湯：乾姜、茯苓、白朮、甘草

苓甘姜味辛夏仁湯：乾姜、五味子、細辛、茯苓、甘草、半夏、杏仁

大建中湯：乾姜、蜀椒、人参、膠飴

桂枝湯：桂枝、芍薬、生姜、大棗、甘草

麻黄湯：麻黄、桂枝、杏仁、甘草

葛根湯：麻黄、桂枝、芍薬、生姜、大棗、甘草、葛根

小青竜湯：麻黄、桂枝、半夏、乾姜、芍薬、五味子、細辛、甘草

当帰芍薬散：当帰、川芎、芍薬、茯苓、蒼朮、沢瀉

温経湯：当帰、川芎、芍薬、牡丹皮、麦門冬、人参、甘草、阿膠、半夏、桂枝、呉茱萸、生姜

六君子湯：半夏、生姜、茯苓、蒼朮、人参、陳皮、大棗、甘草

## ポイント

■「寒」への対応方法と目的

浅岡俊之

[www.asaoka.org](http://www.asaoka.org)

## 今回からご参加の先生方へ

東洋医学の治療概念には「本治」と「標治」というものがあります。

■ **本治**：病態の根源を正すことにより症状を取り去ること

■ **標治**：とにかく目の前の症状を取り去ること

病や不調に悩む患者さんを楽しめることが医療の目的ですが、そのやり方には上記の二通りがあるという考え方です。日常に目を転じて例を挙げれば

〈街中 ゴミだらけになったら大変〉

→ ゴミ処理能力をあげる：これは標治

→ ゴミを出さないようにする：これは本治

治療に際して、これらのどちらが優れているかということに関しては一概に言えることではありません。場合によって使い分けられるべきものであるということです。ただ、投薬を行う際には当事者はどちらを行っているのかをはっきりと意識するべきですね。

東洋医学には「養生」という言葉も用意されています。養生とは病にならないための日頃の注意事項、生活上守った方がよいとされる事柄です。大抵の場合、養生は我々の願望とは正反対の方向性を持ちます。要するに「やりたくないことばかり」が書かれています。それも当たり前、節制とはそういうものです(ゴミの例で考えてみてください)。

その養生ができない結果としてまねかれたトラブルに薬を用いるというのが東洋医学の考え方。だから薬を使う前に養生をせよ、ということになります。殆ど全ての人にとっては「耳が痛い」お話なのですが、これも仕方ありません。我々はそういう生き物だと認めるしかありません(ゴミの例で考えてみてください)。

漢方薬による治療を「体質改善」と表現する向きがあります。しかし、体質改善とはそれはそれは大変なこと。それこそ養生でもしなければ到底実現し得ない大事です。

いくら薬を駆使したところで、「体質改善をしてくれ」とは無理な注文と言わざるを得ません。例えば

〈アレルギー性鼻炎に小青竜湯〉

は本当に体質改善なのでしょう？ もしそうなら、体質が変わったのだからもう薬を飲まなくても症状は出てこないはずでは…？ (ゴミの例で考えてみてください)

漢方治療にはかけがえのない価値があります。しかし、それを取り違えてはなりません。「お手軽に副作用が少なく済む薬」だから価値があるのではなく、「本当によくなる方法も知っている」ところに価値があるのだとお考えください。もしそのことに気づかなければ、漢方薬はただの「使い方が難しいやっかいな薬」になってしまうからです。